

## 子罕第九

子在川上曰、  
逝者如斯夫。不舍昼夜。

子、川の上に在りて曰わく、  
逝者は斯くの如きかな。昼夜を舍かず。

(9-222)

<子、川の上に在りて曰わく>

Q：「子、川の上に在りて曰わく」とは何ですか。

A：(1)「孔子が、川の岸辺に立って言った」の意。

(2)「孔子がある時、川のほとりに居て、流れてやまない川の水をながめて詠嘆していうには」の意。

(3)「川上」とは、川のほとり。

<逝者は斯くの如きかな。昼夜を舍かず>

Q：「逝者は斯くの如きかな。昼夜を舍かず」とは何ですか。

A：(1)「昼も夜も、一瞬もとどまることなく流れ続ける、この川のように、学問もまた、そうではなければならない」の意。

(2)「過ぎ去って帰らぬものは、すべてこの川の水のようであろうか。昼となく、夜となく、一刻も止むことなく、過ぎ去っていく。人間万事、この川の水のように過ぎ去り、うつろっていくのだろう」の意。

(3)「逝」とは、ゆきて還らぬの意味の字。

(4)この文はいわゆる「川上の嘆」として有名だが、2つの解釈がある。

1つは、(2)のように川の水の不断の流れの如く、時が過ぎて空しく老いていく我が身を孔子が詠嘆したものと解す。

もう1つは、(1)のように天地の化育、日月の流れは、一息も休むことがないのは、ちょうどこの川の水の昼夜のへだてなく流れて止むことのないのと同じである。この無限の天地の発展、持続の中に人もまた絶えず発展してゆく。学者はこの理を悟って、時々省察して、少しも間断なく努力をしなければならぬ。要するに、詠嘆の悲観の言葉ではなくて、人の進歩についての希望を述べたものと解す。

2011年6月22日林明夫記